

# 「物色」の倭製

—「沫雪」の場合—

井上 さやか

## —はじめに

倭語は、漢語を記すために生まれた漢字を利用することによって、はじめて書き記すことを得た。そのため、倭漢の文学を比較することにおいては、漢籍をどのように学び取り入れたかという視点が中心的にならざるを得ない。しかしながら、倭語と漢語は本来まったく異なる体系であることから、漢字を借用しながらも倭語独自の運用がなされた。仮名や国字・国訓の類が生み出されたことや主に名詞を取り入れている<sup>1)</sup>ことが、それを物語っているといえよう。

言葉は、社会や自然環境といったさまざまな要因によって形成された文化を背景に持ち、文化は言葉で世界を認識していくことよって形成されるものであろう。倭漢の場合は、同じ東アジア漢字文化圏ともいえるが、別の言語が使用されていることから、大きな文化的相違もまたあるということになる。つまり、古代において漢籍の語彙や概念を取り入れる際には、文化的背景ごと移入された場合と、倭風に改変するかまったく別のものに置き換えることで取り入れた場合とがあったと考られることになる。

そこで本稿では、集中の語彙や表現を、その文化的背景も視野に入れつつ漢文学と比較することで考察してみたい。

集中の語彙は、仏教用語などの十数例の語（餓鬼・布施など）を除けば、倭語に置きかえられている場合が多い。つまり、漢語の音や概念をそのまま取り入れている例は極端に少ないということができであろう。そうした集中の名詞の用字についてはすでにまとめられている<sup>2)</sup>。そこで、殊に集中における季節を表す物の名である「物色」について考察することにする。

季節を表す物の名は、「物色」よりも「季節語」や「景物」という用語で表されるのが一般的である。

「季節語」については、集中の歌のうち「季節歌」と認定されたものの中から、「主要なる季節語」が提示されている<sup>3)</sup>。しかし、集中の歌の多くが何らかの形で季節を詠んでいるともいえ、「季節歌」や「季節語」は後世の便宜上の用語であることから、その概念も認定基準も論者によって異なっているのが現状である。

「景物」についても同様のことがいえる。集中には「景」の用字例はあるが、今日的な意味で用いられてはいない<sup>4)</sup>上に、言葉による景の表出、すなわち「叙景」が自覚的に行われていたとはいえず、「叙景」という概念用語が近代のものであることは、これまでに指摘されてきている<sup>5)</sup>。そこで、集中にも用いられている「物色」が注目されてくるのである。

「物色」とは、元来『文心雕龍』や『文選』にみられる、漢文学における季節の物の名を意味する概念用語である。天地草木を“物”として捉え、その“いろどり”を描くことで、四時を言語によって写しとることが可能となったとされる。<sup>⑥</sup>

これが集中でも三例（8一五九九左注、17三九六七序文、20四四八四左注）見出されるのである。巻八と巻二十の例は大伴家持、巻十七の例は大伴池主によるものである。

漢文学を下敷きとした文芸的親交の深かった二人の使用であることや、「物色」が『風土記』や『懷風藻』にもみられる語であり、漢文学の四季観に基づく物の名として持統朝以降の暦などの獲得にもなつて我が国に流入した概念であったことが、すでに指摘されている。<sup>⑦</sup>

ただし、それは「物色」という漢語を明確に使用した例についての言及であり、上代における季節の捉え方の一部分としてより一般化したかたちで用いられてきたわけではなかった。

「物色」という用語は用いていなくとも、季節の観念とそれを表すための語彙を意識的に用いているとすれば、それは漢文学の「物色」に匹敵する倭製の〈物色〉であるということができると考える。

四季の概念は、『日本書紀』持統天皇四年（六九〇）十一月条に「元嘉曆」「儀鳳曆」が百済や新羅を通じてもたらされたとあることから、これらが採用され具注曆が用いられるようになって以降に形

成されたと思われる。集中には巻八・巻十といった四季分類された歌巻が存在し、これを編纂したのは大伴家持であると考えられている。<sup>⑧</sup>

「物色」という用語で認識される漢文学における季節観は、中国大陸の自然条件を背景としたものであり、当時の大和の自然条件には合わない部分もあったと想像される。このとき、漢文学の「物色」の概念から、新しく倭歌における〈物色〉を形成することもあり得るであろう。もし漢語に例のない語彙で季節の「物」を把握しているのであれば、そこに倭文学としての〈物色〉を見出すことができると思われる。

筆者は別に、山部赤人の春雑歌（8一四二四〜七）を取り上げ、季節観に基づく〈物色〉を表出した歌々として考察した。<sup>⑨</sup>そこでは四季観が新たな「自然」を形成し、漢籍の語などを踏まえた倭歌の〈物色〉が発見されたと考えた。ただ、赤人歌の解釈にしばしば用いられる「叙景」という近代的な概念用語を、古代的な概念用語である倭歌の〈物色〉で捉え直そうと試みる点に重きをおく論であったため、当該歌以外については触れなかった。

そこで、本稿では改めて集中の語彙に着目し、季節を象徴するような〈物色〉として「沫雪」の例を取り上げて論じることとする。四季分類歌に特徴的な語として、別に拙稿「万葉集の『沫雪』」（『同朋文学』三二号 平15）でも取りあげたが、集中において、

「雪」が「白雪」「霜雪」「沫雪」などと表されているなかで、管見では「沫雪」だけが漢籍に例のない語であるためである。これを漢文学の「雪」と対比したとき、倭の概念によって形成された〈物色〉として浮き彫りになると考えられる。

前掲の拙稿とはまた異なる見地から「沫雪」という語彙を取り上げて、倭漢の文学を双方の背景にある文化的な類似と相違を捉えつつ比較し、『万葉集』における〈物色〉の倭製について考察していくこととしたい。

## 二 集中の「沫雪」―「梅」との取り合わせから

「沫雪」という語は、集中に十五例あるうち四季分類の歌巻に十四例を数え、しかもその十四例中の十三例までが「沫雪」という表記で統一されている。<sup>10</sup>このことから、「沫雪」は四季分類歌に特徴的な語ということが出来る。本稿で取り上げる所以である。

まずは、集中の全用例をあげておこう。

- |    |   |
|----|---|
| 2  | 大伴宿祢村上梅歌二首<br>含有常 言之梅我枝 今日零四 沫雪二相而 将開可聞<br>(8 一四三六)     |
| 1  | 駿河采女歌一首<br>沫雪香 薄太礼尔零登 見左右二 流倍散波 何物之花其毛<br>(8 一四二〇)      |
| 3  | 大宰帥大伴卿冬日見雪憶京歌一首<br>沫雪 保杼呂保杼呂尔 零敷者 平城京師 所念可聞<br>(8 一六三九) |
| 4  | 角朝臣廣辨雪梅歌一首<br>沫雪尔 所落開有 梅花 君之許遣者 与曾倍弓牟可聞<br>(8 一六四一)     |
| 5  | 紀少鹿女郎梅歌一首<br>十二月尔者 沫雪零跡 不知可毛 梅花開 含不有而<br>(8 一六四八)       |
| 6  | 大伴坂上郎女歌一首<br>沫雪乃 比日續而 如此落者 梅始花 散香過南<br>(8 一六五一)         |
| 7  | 大伴田村大娘与妹坂上大娘歌一首<br>沫雪之 可消物乎 至今尔 流経者 妹尔相曾<br>(8 一六六一)    |
| 8  | 大伴宿祢家持歌一首<br>沫雪乃 庭尔零敷 寒夜乎 手枕不纏 一香聞将宿<br>(8 一六六三)        |
| 9  | 梅枝尔 鳴而移徙 鶯之 翼白妙尔 沫雪曾落<br>(10 一八四〇)                      |
| 10 | 卷向之 桧原毛末 雲居者 子松之末由 沫雪流<br>(10 一八四〇)                     |

11 沫雪者 今日者莫零 白妙之 袖纒将干 人毛不有君  
あわゆきは けふはなふりそ しらたへの そでまきはさむ ひともあらなくに (10二三二四)

12 吾背子乎 且今々々 出見者 沫雪零有 庭毛保杼吕尔  
わがせこそ いまかいまかと いでみれば あわゆきふれり にほもほどろに (10二三二二)

13 八田乃野之 浅茅色付 有乳山 峯之沫雪 寒零良之  
やたのの あさちいろづく あらちやま みねのあわゆき さむくふるらし (10二三三三)

14 阿和雪 千重零敷 戀為来 食永我 見偈  
あわゆきは ちへにふりしけ こひしくの けながまわれはみづしのははむ (10二三三一)

15 娘子臥聞夫君之歌 從枕舉頭應聲和歌一首 烏玉之 黒髪所沾而 沫雪之 零也来座 幾許戀者  
ぬばたまの くろかみぬ れて あわゆきの ふるにやまます こことふれば (16三八〇五)

今案此歌其夫被使既經累載而當還時雪落之冬也因斯  
娘子作此沫雪之句歟

例14の「阿和雪」の用字例から、「沫雪」はアウユキとよまれて  
いたことがわかる。

「沫雪」は一般に「雪」と区別されることなく解釈されている。<sup>①</sup>  
しかし、単なる「雪」ではなく「沫雪」という語が用いられたこと  
は、そこに違った意味合いが込められている可能性を示唆している  
とも思われる。

たとえば「梅」との取り合わせがみられる例をみてみよう。

「沫雪」が「梅」とともに詠み込まれるのは例2・4・5・6である。  
それぞれの作者名から、天平元年(七二九)以降の作に限られてい  
るといえる。これは外来植物である「梅」が集中ではほぼ、天平二  
年の梅花宴歌群(5八一五〜四六)から詠まれ始めることに呼応す  
る。

例2・4では「梅」の花を咲かせるものとして、例6では散らせ  
るものとして「沫雪」が詠まれている。また例5は、十二月に「沫  
雪」が降るというのに、知らずに「梅」が早すぎる開花をするとい  
うことをいうために詠み込まれている。「含不有而」と表現されて  
おり、つぼみの段階を飛び越えて開花してしまうというのであるか  
ら、開花を促すものという認識がうかがえて、その点で例2・4に  
通底しているといえる。

一方、「雪」と「梅」の取り合わせは、単純に二語を含む歌だけ  
を数えても集中に二十六例がある。梅花宴は大宰府において開かれ  
た漢風の文雅の宴で、「梅」そのものが珍しい植物であり、「雪」と  
「梅」を見紛うと表現する趣向は、実景というよりは「梅」を素材  
とする文雅の宴に欠かせなかつた表現であると理解されている。<sup>②</sup>

梅花宴歌以外の、四季分類された歌巻である巻八・巻十の中にあ  
る「雪」と「梅」の取り合わせ表現をみても、同様の趣向がみられ、  
天平期の特徴的な表現として捉えることができる。

しかし、それらの「雪」と「梅」との取り合わせは、白い色をイ

メーヅの上で重ねあわせることに焦点があるのであるが、「沫雪」と「梅」の場合は白い色を詠むことはせず、「梅」の花を咲かせあっているのは散らす契機として詠出されていた。「梅」と「雪」のような、白色にちなんだ取り合わせがみられないことは重視すべきであろう。ここから「雪」と「沫雪」との認識の違いをうかがうことができる。「沫雪」と「梅」の取り合わせが「雪」と「梅」の取り合わせとは別の意図による表現であったとすると、改めて「沫雪」と単なる「雪」とを区別して捉え直してみる必要がでてくるといえよう。

### 三 集中の「沫雪」——降り方の特徴から

「沫雪」の意味は、用例に共通する「沫」の漢字そのものが「泡」に通じることから、従来は“泡のような雪”と解釈されることがほとんどである。「はらはらと降る泡状の雪」<sup>⑬</sup>、あるいは「泡のような白く細かい雪」<sup>⑭</sup>などとされて、“泡のよう”であるという点が一致している。

しかし、“泡のような雪”とは一体どのような「雪」をイメージすればよいのであろうか。

例1をみると、「沫雪」が「薄太礼尔零」様子と「花」が「流倍散」様子が重ね合わせられている。「花」は具体的に示されていないが、それが「流倍散」と見えるような降り方であることによって「沫雪」と認定されているようである。風に乗って流れるような降

り方を表現していると思われる、非常に軽い雪片をイメージさせるといえよう。

例3は、「沫雪」が「保杼呂保杼呂尔零敷」く様子から「平城京」を懐かしく想い起こすという歌である。「沫雪」がどのようなもので、それがなぜ「平城京」を想起させるのかは、「沫雪」のイメージを考える上で非常に重要である。

「沫雪」と「平城京」の関係は、集中ではほかに取り合わせられた例がないので簡単に結びつけられるものではない。ただし、「保杼呂保杼呂尔零敷」くということ両者の結びつきが表現されているとみえる。この点に注目すれば、例3・例12の「保杼呂」と例1の「薄太礼」といった類似する語が見出される。

集中に「沫雪」以外の語と結びついているホドロは四例、ハダレも四例がある。

ホドロ

夜之穂杼呂 吾出而来者 吾妹子之 念有四九四 面影二三湯

(4七五四)

夜之穂杼呂 出都追来良久 遍多敷 成者吾胸 截焼如

(4七五五)

秋田乃 穂田乎鴈之鳴 闇尔 夜之穂杼呂尔毛 鳴渡可聞

(8一五三九)

夜乎寒三 朝戸乎開 出見者 庭毛薄太良尔 三雪落有(二云、



公務を終え、雪をおして逢いに来てくれた夫君の愛情に感動しているさまが、「沫雪」によって黒髪が濡れているのをいうことによって表現されているといえる。

このようにみると、語の意味は文脈に沿うもので本質的に単一化はできないとはいっても、集中の「沫雪」にはいくつかの意味が重層的に存在していると考えられる。

#### 四 「アワ」と「沫」

次に、ほかの文献での「沫雪」は、集中と同様に重層的な意味が見出せるのかという点を探ってみる。

中古以降の和歌には「あはゆき（淡雪）」という語の用例がある。はかなくて上の空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあは雪

（『源氏物語』若菜上）

これ以降、「春」と「あはゆき」と消えやすく「はかないもの」という意味は密接に結びつき定着したと考えられる。

これを踏まえてか、集中の「沫雪」についても「泡のように消えやすくはかない雪」と解釈される<sup>15</sup>。たしかに「沫」を「泡」と捉えると、それは消えやすくはかないものの代名詞であるため、「淡雪」と同じ意味に解釈できるといえる。例7では「沫雪」が「可消物」にかかり、「消えやすい」との意味が受けとられるので、集中でも“消えやすい”ことを意味する場合がまったくなかったとはいえない。

い。

しかし、それ以外の十四例では“消えやすい雪”という意味では十分に理解できないと思われる。

これまでみてきた、例2・4・6のような「梅」との取り合わせや、例3・8や例12・14のような降り敷く様子をいう例には、“消えやすい”という意味は関わってこない。例1・9・10の、風に流れるように降る様子を表現する例についても同様である。

「雨」の一形態として捉えていたと思われる例11・13・15にしても、“消えやすい”ことを意味するわけではなかった。

また、上代の「沫雪」の場合は、「阿和雪（アワユキ）」であり、「淡雪（アハユキ）」とは「ワ」と「ハ」の違いがあって、同じ語とはいえないという指摘もされている<sup>16</sup>。

『倭名類聚鈔』には、「沫雪」について次のように記されている。

日本紀云沫雪「阿和由岐」其弱如水沫

（『倭名類聚鈔』天地部風雪類）

ここでは、「沫雪」は「水沫の如く」弱いものだと言われている。しかし、『日本書紀』をみても、そのような記述は見出せない。

踏堅庭而陥股、若沫雪以蹴散、「蹴散、此云俱穢簸蓮箇須。」  
奮稜威之雄誥、「雄誥、此云鳴多稽眉。」  
発稜威之噴讓、「噴讓、此云举盧毗。」  
而徑詰問焉。（『日本書紀』神代上、第六段本文）  
『日本書紀』の「沫雪」の用字はこれ一例である。同じ挿話での

用例は『古事記』にもみられる。

堅庭者、於向股蹈那豆美、「三字以音。」如沫雪蹶散而、伊都

「二字以音。」之男建「訓建云多祁夫。」蹈建而、待問、何故上来。

〔『古事記』上卷〕

どちらも、スサノオが堅い土を“沫雪の如く”蹴散らしたという様子が描かれている箇所である。“水沫の如く”弱いという記述は見あたらない上、“堅い”という語の対になるような意味で用いられていると考えられる。

さらに『古事記』の歌謡には音仮名による例もみられる。

…多久豆怒能 斯路岐多陀牟岐 阿和由岐能 和加夜流牟泥遠…

〔『古事記』上卷、歌謡4〕

…阿和由岐能 和加夜流牟泥遠 多久豆怒能 斯路岐多陀牟岐…

〔『古事記』上卷、歌謡6〕

こうした記歌謡のアワユキは、「和加夜流牟泥（若やる胸）」にかかる枕詞であり、先にあげた神話の例ともあわせて類推すると、“やわらかい”というイメージが重なることに基づいた比喩表現であると考えられる。

集中でも、「片緒」（12三〇八一）に対する「沫緒」（4七六三）

の用例がみられ、アワを「沫」の字で表していることと“やわらかい”という意味が共通している。

これらのことから、カタ（堅）の対義語としてアワが用いられて

いたと考えられる。

したがって、記紀の「沫雪」の意味は、“泡のように消えやすくはかない雪”という意味ではなく、アワという倭語による“やわらかい雪”を意味していると考えられるのである。

“やわらか”く蹴散らすことが可能な「雪」といえば、“冬”の新雪を想像させる。しかし『倭名類聚抄』の編纂された平安期には、すでに“消えやすくはかない”という意味での“春”の「淡雪」の用例が一般的であったために、語釈もそうした通例から述べられた可能性が高いということができよう。

では、記紀の「沫雪」に比べて集中の用例の意味が重層的であるのは何故なのだろうか。そこで、集中での「沫」の字についても少しみておくと、先にあげた十四例と「沫緒」のほかに七例がある。

一例は「泡沫」（5八八六題）で、題詞中の例であり漢語のホウマツをそのまま用いたものである。この場合は“やわらかい”といった意味はなく、むしろ壊れやすく“消えやすい”という意味で用いられている。

残りの六例（5九〇二、6九一二、7一二六九、一三八二、11二七三四、18四一〇六）はすべて「水沫（ミナワ）」であり、これらも“消えやすい”ものの代名詞として用いられているといえる。

集中の「泡」の字は、八八五番歌の題詞にある一例だけである。

集中において、アワという倭語と結びつけられた漢字は、「泡」で

はなく「沫」であったということになる。

「沫」字は、『万葉集』以外では、前掲の記紀の「沫雪」の例のほか、「沫蕩尊」（『日本書紀』神代上、第二段第二書）や「沫那藝神」「沫那美神」（『古事記』上巻）といった用例がみられる。

「沫」の字義は“あわだち流れる水しぶき”であり、「泡」は“水中・水上の気泡”を意味している。<sup>①</sup>

記紀の神名に用いられた「沫」は“あわだち流れる水しぶき”という本来の字義と結びつけられたように思われる。「泡」とはなり得ていないところに、明確な意識がうかがえるといえよう。

これらを総合すると、「沫」は、“あわだち流れる水しぶき”という文字本来の意味を取り入れた場合と、倭語であるアワと結びつけられ“やわらかい”という意味を持つ語も表した場合があったとみるべきであろう。そうであればこそ、集中にみられたような重層的な用例も理解できるといえる。

そして用字から「泡沫」といった漢語の概念がより強く意識されるようになると、「水沫」にみられたように“水中・水上の気泡”としての「泡」と同一視されていくことになったと考えられる。

集中の「沫雪」はアワという倭語の“やわらかい”意が本来的なものであるが、そこに記紀と同様に「沫」の字をあてたことで“あわだち流れる水しぶき”の意味と“水中・水上の気泡”の意味が付加されたのであり、このことによって重層的な用法が生じたた

考える。

これらの例のうち、巻八の場合は作者が判明しているため、おおよその作歌時期を特定することができる。

例1の作者の駿河采女については、駿河より出仕した采女ということしかわからないが、巻四・五〇七番歌の「駿河采女」も同人とすれば、和銅から神龜年間（七〇八〜七二八）にかけて活動記事のみえる中臣東人との贈答歌（4五一四〜五一六）がある安倍女郎の後に歌が置かれていることから、大まかに七〇〇年代の始め頃の活動時期が推定できる。例2〜8は、それぞれの作者から天平元年（七二九）頃以降の作であると考えられる。例3の同伴旅人はそれ以前からの活動が認められるが、題詞にある「大宰帥」としての任務は七二八〜七三〇年頃であり、やはり天平期の作と考えられる。

つまり巻八の八例は、平城遷都以降の時期、それも天平期に集中しているといえる。

また、巻十の例9〜14については、作者未詳歌で作歌年次も未詳であるが、「梅」が詠まれていることや巻八の「沫雪」の用例と同様の表現が見られることから、例14の人麻呂歌集出歌を保留するとしても、八世紀以前に成立しているとは考えにくい。

記紀の用例などを含めたとしても、「沫雪」という語彙が八世紀以前にさかのぼる例は見出せないといえよう。

しかも集中の用例では、例3〜8・10〜14の十一例が“冬”とし

て分類されている上に、“春”に分類された例1・2・9の三例も、「花」「咲く」「鶯」など他の語に引かれて分類されたとも考えられる。四季分類歌ではないが、例15の左注には、「沫雪」の句に注目して、“冬”に作られた歌かという注者の意見が書かれていることからいっても、歌が分類された時点では「沫雪」イコール“冬”という認識がうかがえるといえる。また、例5には「十二月尔者沫雪零跡」とあり、「十二月」に降るものとして認識されていたことがわかり、歌作の段階でも「沫雪」を“冬”のものと認識していた可能性が高い。

書かれるものとして歌を認識するとき、はじめて「沫雪」の用字が生きているのであり、それによって重層的な意味が生じていったと思われたことを考えれば、集中の「沫雪」は八世紀に成立した語で、しかも四季分類の歌巻に特徴的な“冬”の〈物色〉であったということが出来る。

## 五 漢籍の「雪」

これまでみてきたように、漢字と倭語の融合によって、集中の「沫雪」の用いられ方が変遷していることがうかがえた。そこで次に、漢籍との比較をしておきたいが、管見では「沫雪」は中国文学にはみられない語彙であった。

前述のように「沫雪」の語の成立に「沫」の字義が関わらないと

すれば漢籍に用例がないのも頷けるが、「梅」との取り合わせ表現にみられた“冬”の意味は「沫」の字義からもたらされたイメージであると思われた。とはいえず、「沫」は「沫雨」などの例があるものの、「雪」に関する用例はない。<sup>18)</sup>

そこで、漢籍の「雪」の表現そのものをみてみることにする。

漢籍における「雪」は、おおよそ次のように表現されている。

北風其涼 雨雪其霏〔北風其れ涼く 雪雨ること其れ霏たり〕

惠而好我 攜手同行〔惠にして我を好まば 手を攜へて同行かん〕

其虚其邪 既亟只且〔其れ虚にして其れ邪 既して亟に〕

北風其喑 雨雪其霏〔北風其れ喑として 雪雨ること其れ霏たり〕

惠而好我 攜手同歸〔惠にして我を好まば 手を攜へて同に歸せん〕

其虚其邪 既亟只且〔其れ虚にして其れ邪 既して亟に〕

…後略…〔詩経〕邶風〔北風〕

寒い北風が吹き、「雱」や「霏」によって「雪」が広い範囲に盛んに降りしきる様子が描かれている。

「雱」は『集韻』によれば、「雱雱雪貌」とあり、雪の盛んに降る様を表しているという。「霏」も『説文新附字』に「雨雪兒从雨

非聲」とあるように、雪の降る様をいうものである。

ほかに「霏霏」という例もある。

…前略…

昔我往矣 楊柳依依「昔我れ往きしとき 楊柳依依たり」

今我來思 雨雪霏霏「今我來れば 雪雨ること霏霏たり」

行道遲遲 載渴載飢「道を行くこと遲遲たり 載ち渴き載ち飢

う」

我心傷悲 莫知我哀「我が心傷悲するも 我が哀しみを知る莫

し」

〔詩經〕小雅「采薇」

柳の茂る季節に対して「雪」の降る季節が表されている。「霏霏」

とは、『毛詩伝』に「霏霏甚也」とあるように、雨雪の甚だしく降

る様を表現したもので、そうした激しい「雪」によって行軍の辛苦

を端的に表現しているといえる。

次の例も同様に、激しく降る「雪」を表している。

…前略…

雨雪瀼瀼 見睨曰消「雪雨ること瀼瀼たれども 睨を見れば曰

に消ゆ」

莫肯下遺 式居婁驕「肯て下に遺ふる莫く 式れ居り婁々驕る」

雨雪浮浮 見睨曰流「雪雨ること浮浮たれども 睨を見れば曰

に流ゆ」

如鬢如髦 我是用憂「鬢の如く髦の如し 我是を用て憂ふ」

〔詩經〕小雅「角弓」

「浮浮」は『詩集伝』に「瀼瀼盛貌」とあり、「瀼瀼」は釋文に

「瀼瀼雪盛貌」とあって、「瀼瀼」も「浮浮」も雪の盛んに降る様を

表している。

また、「雪」は恵みの水源でもあったようである。

…前略…

上天同雲 雨雪雰雰「上天雲同まり 雪を雨らすこと雰雰たり」

益之以霏霖 既優既渥「之を益すに霏霖を以てし 既に優かに

既に渥し」

既霑既足 生我百穀「既に霑ひ既に足り 我が百穀を生ず」

…後略…

〔詩經〕小雅「信南山」

「雰雰」というのは『毛伝』によれば「雰雰雪貌」とあり、雪の

降る様をいう。空に雲が集まり、俄に「雪」が乱れ飛ぶように降り

しきる様子が表出されている。

宗教的な儀式歌であるが、ここで祈願されているのは降雨であ

る。『詩經』には早を嘆く歌や、祈雨の歌が散見され、水資源の乏

しさが垣間見えるが、ここでは祈願の結果、「雪」と「霏霖」（小雨）

がもたらされたことが歌われている。その恵みの「雪」は「雰雰」

と激しく降るのである。

このように、『詩経』では一貫して激しい降雪が表現されているといえよう。

次に『楚辞』の例をみておく。

…桂權兮蘭榭 斲冰兮積雪…「桂の權、蘭の榭。冰を斲り、雪を積む」  
〔『楚辞』九歌「湘君」〕

桂の權に木蘭の榭で香木の舟を漕いで、氷をくだき雪を分けて積みながら進むというように、水神である湘君が湘夫人に逢いに行くのが困難をとまなう様が描かれている。「雪」は逢うことがかなわないことを暗喩するための表現とされる。<sup>19)</sup>『詩経』にみられたような実際の自然ではなく、比喩としての「雪」の表現である。

同様の例はほかにもみられる。

…前略…

霜露慘悽而交下兮 心尚忝其弗濟「霜露慘悽にして交々下り、心尚其の濟らざるを忝ふ。」

霰雪雰糅其増加兮 乃知遭命之將至「霰雪雰糅其れ増加す。乃ち知る遭命の將に至らんとするを」

…後略…

霰や「雪」が逆巻くように乱れ降り、ますますそれがひどくなる様子が、屈原の運命の暗喩として表現されている。

次の例もまた、比喩としての「雪」の例である。

…前略…

山峻高以蔽日兮 下幽晦以多雨「山は峻高にして以て日を蔽ひ、下は幽晦にして以て雨多し。」

霰雪紛其無垠兮 雲霏霏而承宇「霰雪紛として其れ垠無く、雲霏霏として宇に承く。」

…後略…

〔『楚辞』九章「涉江」〕

霰や「雪」が乱れ降り、その果てが見えないという様が、屈原が追放されて江南に行く時の心境として表現されている。

同じく追放に苦しむ歌とされている中に、やはり同様の「雪」の表現がみられる。

…前略…

觀炎氣之相仍兮 窺煙液之所積「炎氣の相仍るを觀、煙液の積る所を窺ふ。」

悲霜雪之俱下兮 聽潮水之相擊「霜雪の俱に下るを悲しみ、潮水の相撃つを聴く。」

…後略…

〔『楚辞』九章「悲回風」〕

ここでは、南方の「炎氣」と北方の「霜雪」が対をなしている。南北の自然環境の違いが端的に表されている中で、「雪」は北方の寒冷さを象徴している。

他方で、六朝文学では実際の自然状況に根ざした表現や心情の比喩から徐々に脱して、情を関連させない純粋な景の讚美がみられるようになる。

六朝期の「雪」の代表例といえる「雪賦」をあげておく。

歳將暮、時既昏。寒風積、愁雲繁。梁王不悅、游於兔園。酒置  
旨酒、命賓友。召鄒生、延枚叟。相如未至、居客之右。俄而微  
霰零、密雪下。…後略…

「歳將に暮れんとし、時既に昏なり。寒風積もり、愁雲繁し。  
梁王悦ばず、兔園に遊ぶ。酒ち旨酒を置き、賓友に命ず。鄒生  
を召し、枚叟を延く。相如末に至りて、客の右に居る。俄にし  
て微霰零り、密雪下る。」  
〔『文選』物色「雪賦」〕

以下、「物色」として、「雪」の美を主題に賦が作られているので  
ある。『詩経』などの「雪」の描写が踏まえられながら、次のよう  
に表される。

…前略…連氛累霽、掄日韜霞。霰淅瀝而先集、雪粉糅而遂多。  
其為状也、散漫交錯、氛氳蕭索。藹藹浮浮、漉漉奕奕。聯翩飛  
灑、徘徊委積。…後略…

「氛を連ね霽を累ね、日を掄ひ霞を韜む。霰淅瀝として先づ集  
まり、雪粉糅として遂に多し。其の状為るや、散漫交錯し、氛  
氳蕭索たり。藹藹浮浮として、漉漉奕奕たり。聯翩として飛び  
灑ぎ、徘徊して委もり積もる。」  
〔『文選』物色「雪賦」〕

「藹藹」は『廣雅』釋訓に「藹藹盛也」とあって、さかんな様を  
いう。「奕奕」も同書釋訓に「奕奕盛也」とあって、さかんな様を  
いう。つまりいずれも「雪」が盛んに降る様子を表現したものであ

る。散らばり混じり合い、勢いよく降りつものり絶え間なく乱れ飛ぶ  
といった激しさで降り、やがて果てもなく一面に降り積もると表現  
されているのである。

また、『玉台新詠集』には次のような例がある。

我所思兮在朔涓 欲往從之白雪霏  
「我が思ふ所は朔涓に在り、  
往いて之に従はんと欲すれば白雪霏たり。」

登崖永眺涕泗頽 我之懷矣心傷悲  
「崖に登り永眺すれば涕泗頽  
る、私の懐ふや心傷悲す。」

佳人遺我雲中翮 何以贈之連城壁  
「佳人我に遺る雲中の翮、何  
を以てか之に贈らん連城の壁。」

願因歸鴻超遐隔 終然莫致增永積  
「願はくは歸鴻に因つて遐隔  
を超えん、終然致す莫く永積を増す。」

〔『玉台新詠集』「擬四愁詩四首」其二〕

これも乱れ飛ぶ「雪」を描いており、思い人のもとへ行く際の妨  
げとなるものとしての表現は、『楚辭』「湘君」にみられたものと同  
想であるといえる。

漢籍の用例中には、『万葉集』の例に比べて「沫雪」のような  
“やわらかさ”は見出せず、「ほどろ」「はだれ」といった斑状に積  
もる様子もみられない。

このようにみてくると、「沫雪」の用例がなかったというだけで  
なく、漢籍の「雪」の表現そのものが、そのイメージにおいて我が

国とは根本的に異なっていると考えられる。

## 六 『懷風藻』の「雪」

集中の「沫雪」と漢籍の「雪」とを比べてみると、表現に差異が認められた。

これらは、漢語という倭語とは根本的に異なる言語による表現であったために生じた違いなのであろうか。

これを検証するために、我が国最古の漢詩集である『懷風藻』の「雪」についてもみておくことにする。

『懷風藻』では、集中と同様の「梅」との取り合わせによる「雪」の例（『懷風藻』四四など）がある。そのほかに、次のような例もみられる。

五言詠美人一首「五言 美人を詠む一首」

巫山行雨下 洛浦廻雪霏「巫山行雨下り、洛浦廻雪霏ぶ。」

月泛眉間魄 雲開髻上暉「月は泛かぶ眉間の魄、雲は開く髻上

の暉。」

腰逐楚王細 體隨漢帝飛「腰は楚王を逐ひて細く、體は漢帝に

隨ひて飛ぶ。」

誰知交甫珮 留客令忘歸「誰か知らむ交甫が珮、客を留めて歸

を忘れしむることを。」

（『懷風藻』三四）

「廻雪」は、『文選』卷十九「洛神賦」や『遊仙窟』に例のある語である。「雪」の舞うように降る様をいった特徴的な表現であり、いずれも仙女の美しさの形容に用いている。仙境のイメージであるためか、これまでみてきたような激しい「雪」の表現より、穏やかな様子を表現しているといえる。『懷風藻』の詩も「詠美人」であるから、これらを踏まえた上で美人の描写として「廻雪」が用いられていることになる。

また、次のような例もある。

五言詠雪一首「五言 雪を詠む一首」

雲羅囊珠起 雪花含彩新「雲羅珠を囊みて起り、雪花彩を含みて新し。」

林中若柳絮 梁上似歌塵「林中柳絮の若く、梁上歌塵に似る。」

代火輝霄篆 逐風廻洛濱「火に代りて霄篆に輝き、風を逐ひて

洛濱を廻る。」

園裏看花李 冬條尚帶春「園裏花李を看れば、冬條尚し春を帶

ぶ。」

（『懷風藻』一七）

これは、「雪」を詠む詩であり、「雪」を花にたとえている。こうした表現は、「梅」と「雪」を見紛う趣向からの展開であろう。しかし、それだけでは説明できない現象ともいえる。

むしろ大和における「雪」が、漢籍にみられるような厳しい自然

状況の象徴として認識されてはいなかったことが、大きな要因であるようにも思われるのである。

しかも、この詩では“冬”から“春”への季節の移ろいが主題となっており、「物色」として「雪花」が用いられているといえる。

中国文献の「雪」の表現でも、「洛神賦」や『遊仙窟』といった虚構の自然には、『懐風藻』にみられるような穏やかな「雪」の描写は認められたが、それらが神仙を描く詩文に偏ってみられた点は、大きな問題であるといえよう。

つまり、おおまかにいって『詩経』『楚辞』『文選』と『懐風藻』を比較したとき、中国漢文では厳しい自然である「雪」の表現がみられ、日本漢文においては穏やかな自然としての「雪」の表現だけが採用されているということができる。

## 七 倭製〈物色〉の形成の背景

「雪」に関する表現を通してみてきたように、六朝期以前の『詩経』と『楚辞』では、比興として自然を詠み込み、のちの山水詩にみられるような景の表現や讚美意識は未だみられない。多くの場合、季節や自然物は主題となる情を表出するための前置きであった。そうした『詩経』や『楚辞』と、『文選』などにみられる六朝文学は、自然の表現に差があることがみてとれた。

また、すでに黄河流域を中心とした北方の韻文の代表である『詩

経』と、楚地方すなわち南方の長江流域周辺の韻文の代表である『楚辞』では、政治・文化の中心が南北いずれにあるかによって、表現される自然物が異なり、蘭・菝・荃・葍・蕙・若・芷・蘅などの楚地方特有の植物が詠み込まれる『楚辞』に対して、これらが『詩経』にはみられないことなど、無意識的な南北の地域差が確認できるという。南朝において山水詩が成立するのも、単なる時代的な文学形式の成熟だけが理由ではないという指摘がある<sup>20</sup>。

たしかに、『楚辞』を育んだ中国南部は温暖で湿潤な気候であり、『詩経』に代表される中国北部は寒冷な乾燥帯で、両者の自然条件は大きく異なる。文学を文化のひとつとして捉える際に、自然条件などを含めた環境の差異が固有の文化を形成するという考え方は、前提として受け入れられるものであろう。

かつて和辻哲郎は、自然条件を「風土」ということばを用いて人間の存在の仕方を規定するものとして捉え、歴史的・風土的特殊構造を特に「風土」の側から把握しようとし、日本や中国のそれを「モンスーンの風土」と呼んだ<sup>21</sup>。こうした「風土」論は、文学を含め様々な分野において研究の出発点ともなったが、他方で、気候・地形・景観などとの関わりをどう解釈するかは論者の直感や想像の産物に類したものとなってしまいうという問題があった。その上、ひとたび言葉によって表現された「自然」は現実の自然のあり様とは別物であり、「自然」の表現形成に気候風土をかかわらせて考える

にはよほどの注意が必要であるとも思われる。

日本はモンスーンの影響を受ける地域として、インド・中国などととも「モンスーンの風土」といわれたわけであるが、現在の気象学では、「赤道西風」という小さな風系が発見されたことにより、その風系の移動がもたらす湿潤と乾燥としてモンスーンが説明されるようになってきている。この「赤道西風」はかなり低い高度にあるので、ヒマラヤ山脈に行く手を阻まれることで、一年のうち一定期間、モンスーンの影響を受けるには例外的に高緯度の日本にまで梅雨と呼ばれる湿潤期をもたらす一方で、中国北部等には雨雲が到達しなくなる。また、実際の天候の推移からいえば、日本列島の大部分は六期にわけられ、インド等の熱帯モンスーン地域ならば大まかに雨期と乾期となる。中国についても、気温の高低・乾湿ともに南北差が著しいという。<sup>22)</sup>

このように、一口に「モンスーンの風土」といっても、かつての風土学を支えた常識は、変更を余儀なくされているといった状況である。

これらを踏まえて、先述の「雪」の例を念頭に自然条件を比較してみよう。

紀元前の中国の気候は、紀元前十世紀頃に当時としては最大の気候変動があり急激に寒冷化したと考えられるという。それでも現在にくらべれば全体に温暖な気候だったようであるが、さらに紀元前

十世紀から紀元前七、八世紀頃にかけては乾燥化も認められるとする。<sup>23)</sup> こうした時期に成立したのが『詩経』ということになる。また、紀元前三世紀頃に乾燥化の極のひとつに達したとされるが、この時期にあっても河や湖が多く、梅雨によって当然のように豊かな水を得ることのできた地域が中国南部であり、そこでの歌謡が『楚辞』に収載されていることになる。

つまり、中国北方における「雪」は貴重な水をもたらすものでもあるが、厳しい寒さや激しい降雪といった印象が強いといえ、前節の『詩経』が峻烈な自然条件として「雪」を表現していたことと合致する。そして、中国南部における「雪」は北方に比べて激しさがなく、『楚辞』や『文選』の六朝詩では、難渋することの比喻に用いられてはいるものの、美しいものとして表現されていたことと合致しているといえる。

このことから、『詩経』と『楚辞』の「自然」の違いは、漢文学の成熟度や文献の性格の違いという以上に、自然条件の違いが大きな要因であったと考えることができる。

一方、日本列島では、七世紀にかなり顕著な寒冷化があり、八世紀からは、十三世紀まで続いた温暖期がはじまるとされる。<sup>24)</sup> 同じ西日本であっても、七世紀と八世紀とでは乾湿や気温の高低に大きな違いがあったということになる。

すでに天平以前と以降の「季節歌」の差異が指摘されてもおり、

白鳳期は春秋の好季を特に歓迎した結果、春・秋の季節が重視されたとされ<sup>26</sup>、天平期は、季節の推移を自覚し暦日観念と結合して確立した四季意識に基づく歌が詠まれたと考えられている<sup>27</sup>。

これらは時間の経過や新しい観念の流入による表現の成熟として理解されているのであるが、前述の『懐風藻』の「雪」の表現のし方や、集中の「沫雪」の用例などは、先の漢文学の中の南北差と同様に、自然条件の違いの顕れとして捉えることも可能である。

八世紀頃の中国大陸と日本列島では、日本列島の方がより温暖であったともいわれる<sup>28</sup>。

むしろ八世紀の大和の自然条件によってこそ、「沫雪」のような新しい〈物色〉が形成される必然があったといえよう。

## 八 おわりに

以上のように、集中に用例のある「物色」という視点から見出された「沫雪」という語彙の意味を捉え直し、この語彙を含む歌の作歌年代などから、持統朝以降に獲得されたとみられる四季観に基づく倭製の〈物色〉の形成やそれによるイメージの喚起が、倭風の文化によるものと考えて、倭漢文学の比較文化的考察を試みた。

「沫雪」の用例を軸に四季の観念と漢字表記をもたらした漢文学と比較した際、漢文学における自然条件の違いによる文学表現の南北差に着目して、日本列島の自然条件に根ざした文化を背景にした

〈物色〉の形成が認め得ると考えた。

「沫雪」という倭語が、四季分類の歌巻に特徴的であること、それが天平期の四季観に基づく物の名であることを考えたとき、そこに倭製〈物色〉の成立過程をうかがうことができた。

これらのことから、集中の歌における季節の詠出は、季名を冠する語の使用や漢文学の翻訳などによるものに加えて、八世紀の自然条件を背景とした倭の文化から生じた倭製の〈物色〉の自覚と、それによる語彙の形成があったと結論づけた。

※『万葉集』の用例は、鶴久・森山隆編『萬葉集』（おうふう刊）に拠り、一部私に訓を付した。『古事記』『日本書紀』『懐風藻』は日本古典文学大系本（岩波書店刊）に、漢籍の用例については原則として新釈漢文大系本（明治書院刊）に拠った。

（注）

- 1 山田孝雄『國語の中に於ける漢語の研究』（宝文館出版 昭15）
- 2 田中牧郎「万葉集における名詞用字一覽」（『古代の漢字とことば』〈漢字講座 第五卷〉明治書院 昭和63）
- 3 横井博「万葉集の季節歌と季節語」（『万葉集を学ぶ 第五集』有斐閣 昭53）
- 4 中西進「万葉集の自然」（『中西進万葉論集 第三卷』講談社 平6）、野田浩子「〈景〉あるいは〈物〉と〈ころ〉」（『万葉集の叙景と自然』（新典社 平7）
- 5 梶川信行『万葉史の論 山部赤人』（翰林書房 平10）

- 6 中西進前掲論文
- 7 辰巳正明「物色―古代詩歌の景物表現―」（『万葉集と中国文学』笠間書院 昭62）
- 8 阿蘇瑞枝「万葉集の四季分類」（『論集上代文学 第四冊』笠間書院 昭48）
- 9 拙稿「倭歌における〈物色〉意識―山部赤人の春雜歌四首―」（『天平万葉論』翰林書房 平15）
- 10 例14の「阿和雪」も校異が認められ、「阿和」は元暦校本・類聚古集・紀州本（神田本）・温古堂本によるが、西本願寺本では「沫」とされている。全例が「沫雪」であった可能性を否定することもできないが、ここではより古い写本にあるとおり「阿和」と考えて論を進める。
- 11 『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂 昭42）
- 12 東茂美「園梅の景―梅花宴歌と梅花落―」（『古代文学』二二号 昭58）
- 13 井出至『万葉集全注 卷第八』（有斐閣 平5）
- 14 伊藤博『万葉集釋注 四』（集英社 平8）
- 15 大石康夫「あわゆき（沫雪）」の項（『万葉ことば事典』大和書房 平13）
- 16 澤瀉久孝『万葉集注釋 卷第八』（中央公論社 昭36）など
- 17 沫―「善曰噴沫跳沫也」（馬融「長笛賦」の注）、「冰井騰沫」（夏侯湛「大暑賦」）  
泡―「浮漚楚書如夢幻泡景」（『正字通』）
- 18 「沫雨雨潦上覆盆也沫雨或作流潦」（『淮南子』説山訓の注）
- 19 星川清孝『新釈漢文大系34 楚辞』（明治書院 昭45）
- 20 小尾郊一『中国文学に現われたる自然と自然観―中世文学を中心として―』（岩波書店 昭37）
- 21 和辻哲郎『風土―人間学的考察―』（岩波書店 昭10）
- 22 鈴木秀夫『風土の構造』（講談社 昭63）
- 23 鈴木秀夫『気候変化と人間―一万年の歴史―』（大明堂 平12）
- 24 安田喜憲『文明の危機』（朝倉書店 平8）
- 25 阪口豊「日本の先史・歴史時代の気候」（『自然』五月号 昭59）
- 26 山崎馨「白鳳の季節歌」（『万葉集を学ぶ 第五集』有斐閣 昭53）
- 27 森脇一夫「天平の季節歌」（『万葉集を学ぶ 第五集』有斐閣 昭53）
- 28 注23に同じ